

## 2019年6月の大気大循環と世界の天候

### 大気大循環

500hPa 高度をみると、北極付近、中央シベリア～ベーリング海、グリーンランド付近、ヨーロッパ東部で正偏差、ヨーロッパの西海上、カラ海付近、オホーツク海で負偏差となった。中高緯度では波列パターンが卓越した。200hPa 風速をみると、亜熱帯ジェット気流は、北アフリカにおいて平年の位置と比べて南寄りを流れた。寒帯前線ジェット気流はヨーロッパ西部で南に、ヨーロッパ東部で北に蛇行した。海面気圧をみると、東シベリア～カナダの西海上、グリーンランド付近、ヨーロッパ東部で正偏差、ヨーロッパ西部、カラ海付近、中国南東部～日本の東で負偏差となった。850hPa 気温をみると、ヨーロッパ東部付近、中央シベリア付近で高温偏差、ヨーロッパの西海上、西シベリア付近、オホーツク海で低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、中部アフリカ北部～インド洋熱帯域の西部、ベンガル湾～南シナ海南部、西部太平洋赤道域で活発、インド～フィリピンの東海上、南インド洋熱帯域の東部、中米付近で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、インド洋～太平洋を東進した。対流圏上層では、南北半球の広い範囲で低気圧性循環偏差となった。北アフリカ～日本付近では亜熱帯ジェット気流に沿って波列パターンが卓越し、北アフリカ東部、中央アジア、日本付近で低気圧性循環偏差が明瞭だった。対流圏下層では、南インド洋熱帯域の西部で低気圧性循環偏差、

フィリピンの東海上、北太平洋熱帯域の東部～メキシコ湾で高気圧性循環偏差となった。海面気圧は、赤道域ではインドネシア付近、南米～アフリカで正偏差、インド洋西部、太平洋で負偏差となった。南方振動指数は-0.7だった。

### 世界の天候

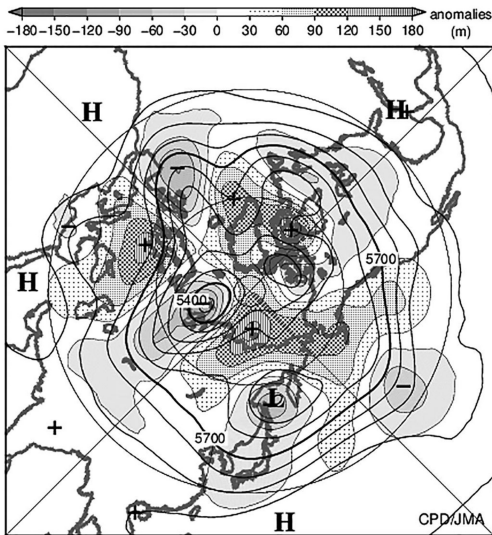
世界の月平均気温偏差は+0.45°C（速報値）で、1891年の統計開始以降、6月として最も高い値となった。6月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.72°C/100年（速報値）である。

主な異常天候発生地域は次のとおり。

- インド南部、インド北西部～パキスタン南部、ヨーロッパ～中東、中米及びその周辺、南米中部～南東部で異常高温となった。
- ブラジル南部～アルゼンチン東部で異常多雨となった。
- 東南アジア北西部～インド南東部、ヨーロッパ東部～北アフリカ北西部で異常少雨となった。

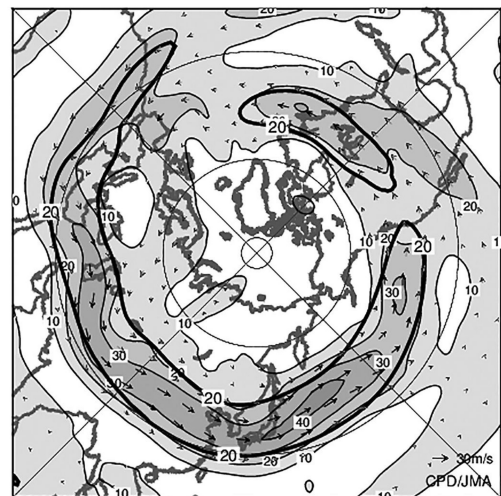
（気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課）

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。  
<https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



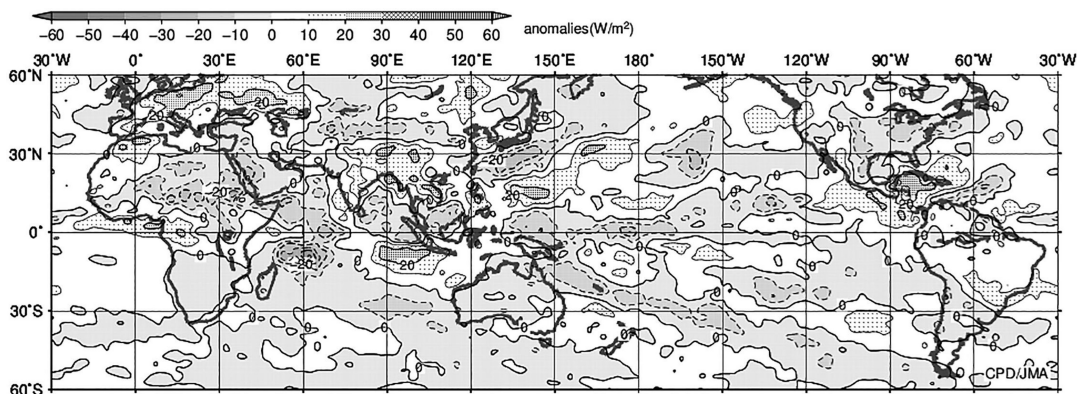
2019年6月の北半球月平均500hPa 高度及び平年偏差

等値線間隔は60m。陰影は平年偏差。平年値は1981～2010年の平均値。



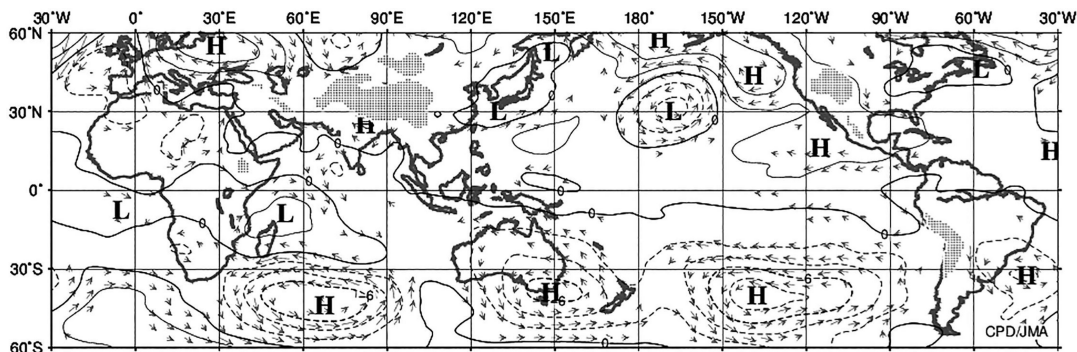
2019年6月の北半球月平均200hPa 風速及び風ベクトル

等値線間隔は10m/s。太実線は平年の風速で等値線間隔は20m/s。平年値は1981～2010年の平均値。



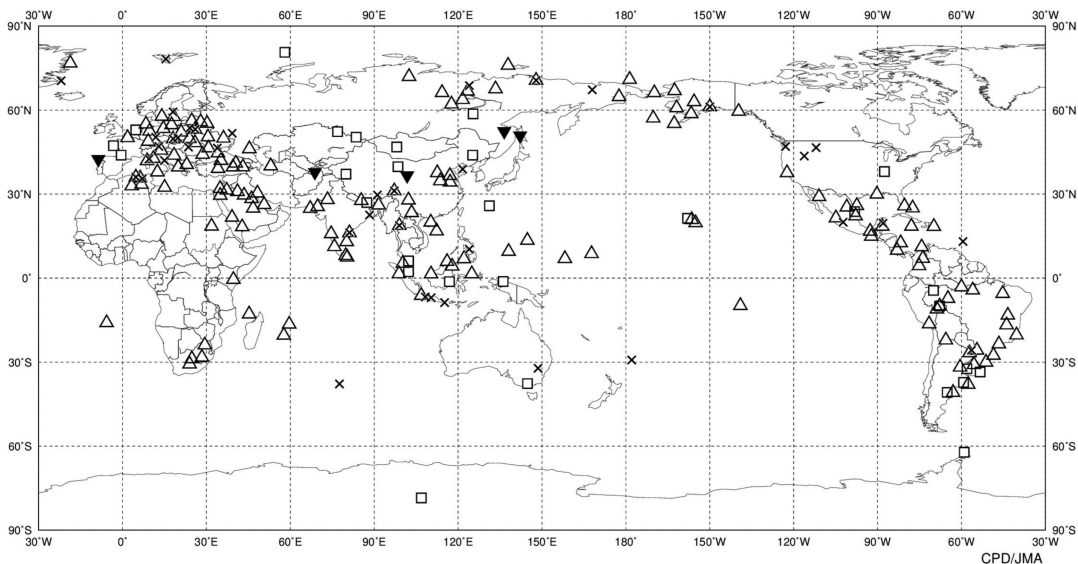
2019年6月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は $10\text{W/m}^2$ で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁(NOAA)より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1981~2010年の平均値。



2019年6月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6\text{m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1981~2010年の平均値。



2019年6月の世界の異常天候分布図

△異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨

異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。